武江年表

839
8
62

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62

ガラス使用

武江年表

江戸書鋪
青藜閣

根岸信輔氏寄贈

武江年表序

龍泉大阿之塵於豊城也。菊蔚紫氣騰誇斗牛之間。其威靈如此。而終山於石函。是雌雄似難。嗚呼何顕晦無聊。之恨哉。隆然。其至復有匹於延平之津。則生或一可無知

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

矣其靈可益見矣由是欽之嚮
似可怪者即是泉阿之威
靈取以傳于萬古而不磨滅而
顯晦之取關係為家大矣豈翅
象何凡物之有匹自有其
數存焉何乖憂先失得哉
友人齋藤月岑家職之暇

著書若干種既行于世今
茲又著武江年表八卷分
為雌雄先取其雄四卷梓
之其為書也自慶元韓鞬
迄于今日大之天災地妖坊
街之沿革世態之遷流物
之權輿事之興廢小之沙

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

人之生卒。神佛之啓合龍。及
風語俗談。称玩戯具。纓羅
不遺。攛掇尤勉。凡二百年来
之事讀。一注一来。隨求隨
在。讀者憂其易終而更無
繼。豈無継哉。事勢鞅掌。操
觚不苟。退待来日耳。其至

如泉阿復匹。童鱗搭沙。彩
光射波。見其美一可全見矣。
其功可愈知矣。奚別此編
之雖嗚以待来日者。亦取以
兆雌雄相匹。傳于萬古而
不朽也。其何憂之事。須
日剞劂竣工。發兌卜吉。仍舊

貫乞序。余亦不敢辭。便題
蕪辭。以為延平前尋云。
永永二年。屠雅旭墨。五月
之澣。

荊山陣人源瑜

七十若戰驅鯨紙扇籃
輿致太平竊賂孫謀臣列
國日光高照海東城
試神劍羅并牧棺二百年
間不動兵　官家今日真無

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

事幾霞高歌唱太平
四月十七日作二首

右二絶句者文化元亥夏
日光宗廟御忌之辰鵬齋氣田翁
之作手親筆取以贈先考也々取
以弁於巻首云

月岑誌

提要

○慶元より呂降羅雲の化光世に被り穀下の萬國日に陪せり此故に
遐陬僻境の人といへども千里を遠しとせず顧佳麗を看厥廣大を
仰くところて嚮に父祖の名所図會あれ事親観の栞とし次に余ら
歳事記を編して亦導引とし再此輯をなし村澤聖孃の為に
東武般若華の梗槩を知らしむるの一助とし

○此編に載る所は中人以下の耳目に解ることを入にして地理の沿革
或は坊間の風俗事物乃推稟に至るまで獲る所に随て誌す素より
公辺乃御事は伺ひ知るべきにあらずたゞ傳聞せる事も悉く
ものに漏せり

○昔元以来新地を撰ませ法度列臣の藩邸地を限て取に捧へ
寺社民屋も地を賜ひて新に創し或は詩歌の変に罹りて處を
異にするの類多くて数ふへからず故に見聞に考へらひて一二を

記一須細の事ゝあり不漏せり

○惠信尼并女の教恩賞を賜りし事源平の事門弟の書ゝ員えさる
姑く新編ゝ脫せり

○新古墨客往來の跡其他有名の家
所をもて一二を擧す貴人ゝ多ゝ
もまゝ遺漏ゝ多ゝ（九出編ゝ漏ゝ老樓好ゝ墓前一覽ゝ）

○東武の人著ゝ所の新編の書ゝ半ゝ
尽ゝ爲ゝ校ゝあゝゝ江戸の事源名所ゝ
撰ゝ新編上木の事ゝ序をもとめゝ

○好世の風俗を知ゝんとせゝ員外ゝ
首ゝ拾遺・塵塚談・譚海ゝ話ゝ言・我衣・
塲の事ゝ骨董集ゝ冊子あり

○文化中編輯せる大江戸ゝ秋ゝ頭せる事一ゝあり（他共ゝ洋ゝ大凡新編の粹

載ゝ所ゝ多ゝ拾ゝ集ゝ所ゝ事源今尋ゝとりゝて
完備のおもゝゝ人ゝ
もゝ遺漏ゝ多ゝ

○東武の人著ゝ所の新編の書ゝ半ゝ
尽ゝ爲ゝ校ゝあゝゝ江戸の事源名所ゝ
撰ゝ新編上木の事ゝ序をもとめゝ

○好世の風俗を知ゝんとせゝ員外ゝ
首ゝ拾遺・塵塚談・譚海ゝ話ゝ言・我衣・
塲の事ゝ骨董集ゝ冊子あり

○文化中編輯せる大江戸ゝ秋ゝ頭せる事一ゝあり（他共ゝ洋ゝ大凡新編の粹

載ゝ所ゝ多ゝ拾ゝ集ゝ所ゝ事源今尋ゝとりゝて完備のおもゝゝ人ゝ
もゝ遺漏ゝ多ゝ（九出編ゝ漏ゝ老樓好ゝ墓前一覽ゝ）

○東武の人著ゝ所の新編の書ゝ半ゝ
尽ゝ爲ゝ校ゝあゝゝ江戸の事源名所ゝ
撰ゝ新編上木の事ゝ序をもとめゝ

○好世の風俗を知ゝんとせゝ員外ゝ
首ゝ拾遺・塵塚談・譚海ゝ話ゝ言・我衣・
塲の事ゝ骨董集ゝ冊子あり

○文化中編輯せる大江戸ゝ秋ゝ頭せる事一ゝあり（他共ゝ洋ゝ大凡新編の粹

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

附言

東都市井の輩事業の無くなる旬日の間乃事と以へ
いとも忘失事耶このことは有り東都の人といへ共に書に
據りて往事を思ひ出せるに世勢の一端ともなるべきあらんかは
雑載稗官にもとるといへとも坊間に裨益あるの冊子なるべし
此編全部八冊なり天正十八年より始りて元年に至る
淨書落成はとりへとも未剞劂の功終らは發兌を急くか故
今年初帙四冊を公布せ坊帙四冊續て發行せ事し

己酉孟冬　書肆　青藜閣誌

青藜閣記

武江年表巻之一

天正十八年庚寅

今年八月一日台駕はじめて江戸の御城へ入らせなへ是その
おろハ　御城の辺葦沼汐入等の地にして田畠もなかりしが農家
ち流さへ所々に茂ぬ在せしを茂長にあり始て山を裂地をなかし
川或堤の溝を堀士民の所居を定めなひしとり万世不易の大都會
とハなまりしとりしとのうて万民干戈の危きを忘れ鼓腹して
娯しを極め泰平の　御恐澤に浴しなれありがたき事中も申く
おろかなるべし　中古より八月一日を田の実と号して佳節とはいはけて今年　御打入
八月一日なる故毎年八朔の御祝儀又父の佳節と等しく御恭例となりし
とぞ○今年七月北条氏政一家滅亡小田原落城あり○事跡合考に

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

御入國の後日本行徳の鹽を江戸へ運送の爲波地より船の通路を
堀しめ給ふ今の行徳の通りとゆくり 天文より元亀のころ迄は行徳より小田原
堀の年貢を納し也波地のに俗ふ称ふ
○八月平河天滿宮 御城内梅林坂より 御城の北平河口へ移さる
○夏伊勢の乞市をゆくる 赤穢橋の辺はじめ来 ふ移湯風呂一ツをうるふ
風呂殘永樂一錢あり皆人称ふくし 乾ふ 集ふ出
○日滿山廣德寺 今下谷 小田原より来り 小栗家滅亡の後江戸へ
来り今の昌平橋の沼地を開き草庵を営む 此時の住持を幸叟和尚といふ後
移田へ移り又より後實ふ寺今の
地へ ○天正の頃寧来ふ亂波風間とゆくる 強盗あり 営を焼び陣中へも
移る
思ひ入て営をあけ諸人ふをしるゞ今年より初まへう逃退て生残る
給ふり
天正十九年 辛卯 正月図

正月冥八州の諸家皆前の御賀とゆくる始ふ登 城ありしとふ云
○十一月寧来諸社ふ御寧附願の御朱印をゆそる ○赤坂一ツ木町屋敷
○十二月寧八州通用のふあふ大判小判を造しめふ 此時代銀一枚元今
○小田ふの靈風山稜徳寺今年鞍町へ移り後赤坂一ツ木へ移る

文祿元年 壬辰 十二月八日改元

御城の西北の地大法寺組寺院宅地をゆそる 六組ふりて一番とり
云書まてへの名目あり 元より番町
○田安山於て預ち天正十八年小田原とり向ふへ降下しのち今年
本鉄町の地ふ寺院をゆふ 茶ふ元年又順田町へ移さる 明暦の災後浅草へ
移さるをふの ち院ふくし江戸へ移さるをふの ち院ふくし江戸へ移さるをふの
波地の高家も次第ふ江戸へうつり 吉来領城町の宅地ふ
し ふのみあり又皆て後小田原落去あり こを以年十ふ大ゆそありし家来の妙抱
ゆて江戸へ下り平隊のうちまもなくて居宅しくりが城長の後領城町宅基のみをとり

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

友泳を招て廊をひらけり尚え和の件まである世より又小田原の豪家板田もう左衛
友泳明人なれ又霊香といふ服薬の方を授りしかば小家ありて販ぬ江戸にまり
本町四丁目に住して彼薬を售ふ事大なり旅
ありてわたる今は他人のあり製せり

文禄二年癸巳　九月閏

天正十八年の板品川へ寺地をあたりし日照山法禄寺山英叟
道三河岸へ移る　天和二年深川　今の地へ移る　仏阿上人　今年
我有　○慶安元年命を蒙りて内観政要を漢文にて開板四景我有解の文を
と云　飛りて本草の遊述ともに家とも士岐武牡陽田流波を云ふ文化元年文集ふ
見えたり其の畧は慶安の月の事ふ

たらちねやうくやらを知りゆく

○天正の頃常陸國江戸浄心寺の一和尚ふ給る法名一羽といふ兵法の名人
あり土子泥ふ岩間小熊根岸蒔絵師と云て名を得る者二人あり
依て病の時蒔絵師のこと病人を見捨て逐電して江戸へ来て徽塵流と

名分一派を起して其子孫今に随へ上見ね鐙の鍛ひをおひ一羽と
二筆るて病死しより女人の其子蒔絵師ふ事を学びて弥憤りあ
人の門江戸へ帰りて蒔絵師を対べしと後一寵をとりて小熊ふ改めり
うへ小熊江戸へ帰て泥ふ国ふ止りて廉価の社ふ蒔絵師祖父を折る
小熊江戸へ帰りて文禄二年九月十日日本橋ふ蒔絵師ふ名
より官府より政事を学ぶを刀根ふを預り木刀の仕合をするへ
しふ女人ふ刀を持て立合ふる蒔絵師折角の生ふ切とり逐電して
行方を知らずぞ　以上中条文代記の文を異て武尾蕃う編の武家ふ子そう名
八幡宮の額ふ蒔絵師と名を著しくる家ありしと記せり今ふ伝へ

同三　年甲午

九月千住大橋を始て掛くる　此地の旅人
橋板を踏るあまたに橋板倒まて船を覆一船中の人ふ深ふ伊勢慶蔵持橋現ふ

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

行りて淺草
まといふ ○今年米穀豊饒あり
○小田原不老山壽松院今年内地に移させられ今の鉅治橋の内に
ある院をなすある後年神田柳原の辺へ移り又淺草へ移る

文禄四年乙未

武蔵小判成 光次と書き江武蔵と
後河内原に造させらる ○小田原常知山本誓寺江戸に移し
なひ日比谷獵師町の辺に地をなすある後ち哈町の辺へ移り天和二年
の後今の地へ移る ○芳長見聞集云ゝ丹町と四日市のあひにちひ
さき橋呉一ツあり是は往渡の橋なり文禄四年夏のはじめ此橋のもと
にある銭瓶を掘出せし永東鉄うち定りてありしを
官府へさゝあらしめ支とり此橋を銭瓶橋といふとなり志るしは船町
并四日市町は今の銭かめ橋のあたりに在し物なるへし

慶長元年丙申　七月閏　十二月二十七日改元

一歩并小判金始て通用 芳長令といふ ○六月十二日京師歳門穽東諸国大
霾又氷毛降 毛長サ四五寸 ○閏七月朝鮮人来聘 ○同十二日大地震月を逾て
止ず ○後河臺を穿かる ○多田宗玄といふ人霊告を蒙りて京都
東山の辺より菜師像を持下り本庄に安置今の多田の菜師なり
○鵜町常仙寺宮基寅菜師を安せ

同二年丁酉

神田に光明山感應寺宮創 宮山日感上人なり此手地所許所七年
ちを建る今宮中に在神田感應寺といふ

同三年戊戌

松平為後ち後州より江戸後河臺の下へ移る 後寛永十五寅年に
移り今の淺草へ移る
○八月三縁山増上寺日比谷より今の地へうつる 其ところハ今のヤヨス
うしの土地日比

谷町の方にありしとぞこの辺をひぐや町といふるもむかしハ湖入の地にして漁人海中に枝付の
行を並べ立て魚の入るを待て充ることをひぐといふ正字なし今も海苔をとるに此ヒゞを
用ふひぐ付きをなほ此の住居の地なれハひぐや丁といへり後其口にうつさせてもひぐ
や町と号しけるゝ後ハ其口とあらゝむ新青町 弥左ゑ町 五ゝ町も此舊地に有しとも
○猿江泉養寺宍剣 ○十月令風山高林ち後河臺に於て宍剣あり
後年釣込去物店へ移る

慶長四年己亥　三月団

四月令剛山龍宝寺 天台 非因虚に草剣 寛永十二亥年 浅草新堀へ移る
其後より寛永にいたりて新たに宍剣のち院数ゆゑに迫あらはとりて大なるを撰ひ十に
して一二を誌しその時にあらはれたり

同五年庚子

小判に光次と墨書せしを極市に改らる 光次は徳栄の名栄なり ○六郷橋再掛る 去年 万と云
○始て京都に諸司代を置る ○沈上本門ち大塔建立 翌年にいたり 全く成就せ

同六年辛丑　十一月団

又月大小分判挺銀の形制を定めなふ 後河江戸判掛といふ 大黒銀も此時より撃る
○貞観政要板成 孔子家語武經七書板行せしめなふ 御治世以来の刻本 おゝに始まるなるべし
○安南始て奉書寛永九年まで通路不絶東埔寨始て奉書寛永
四年の后絶たるにや呂宋始て奉書芝長十八年迄今年より寛永十一年
まで三十三年の間御朱印船とて我国く高人亜馬港ノヒスハン暹羅安
南呂宋木の國々に年毎に行て高賣し此外にも私に行て高に
本年々不絶となり 以上茅廣雑談所載
○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋立と成又海上俄に潮
引て三十餘町干潟と成る十七日潮大山のぬく巻上流死斃し
○十一月二日巳の刻後河町幸く悪家より火を出し此大焼亡に江戸町
一宮も跡に人多く死せ早売町中茅葺故火事絶ハ此序に皆

板葺になすべきよし　官府より命せられしかバ町中ことごとく板
葺となりし時瀧山弥次兵衛といふ者諸人に秀でゝ家を作らんとて
海道表棟より半分瓦にて葺後半分をバ板にて葺ける故諸人此を見て沙汰し
けるハ本町二丁目の瀧山弥次兵衛が家を半分瓦にて葺けるさても
珍らしき奇特なる人なりとて異名を半瓦弥次兵衛と云是江戸
瓦葺の始なり　以上慶長見聞集に出

慶長七年　壬辰

寺泥始て奉書紙慶長十一年に出　慶長雑話に出

○小石川無量山寿経寺御菩提寺と成傳通院と号し殿堂御修造御建
立あり繁栄をなす

同八年　癸卯

今年江戸町割を命じ給ふ慶長見聞集に日本六十余州の人歩を
よせ神田の山を崩させ　今駿河臺の東南なり　南の大海四方二十余町埋させ商家
を立させ給ふと云　是まで八大名小路の辺八代洲河岸乃三河岸の辺麹町の辺まで町屋連りてありしとぞ元　江城の辺むかしハ千代田宝田斉田芝崎の
村なり南伝馬町小伝馬町ハ千代田村の内なり大伝馬町ハ宝田村のうちなりしとぞ
ハ千代田宝田ともに今の新の口大手の辺なりしといへり祝田村ハ本石町銀町の辺又桜田
村ハ今の桜田清つの辺なりしが　御城御造営の時今の地へ移させられしよりあり桜田町ハ
も古くは御打入の時早々ひしより紳士に仰くて赤坂一ッ木の町屋にありしハ天正十八年の
事なりとし或古記に見えたり三河町ハ江戸御打入の初三河国より供小人余を召連此所
に旅宿の地を賜りまゝ此所に居らしめ給ふ故明暦をすぎて本国より此所に交代
せしが後に町屋に成りしかと古名を存し三河町と号するよし云く猿楽町といふ鍛冶
鍛冶の屋敷ありしを後へ移されしより紳士に有り
平川ハ村名にして平川といふる流あり今の江戸川神田橋筋より常盤橋の上の方より
飯田町下魚板橋の西へまわり一ッ橋のほし東南の流白銀町池町浜町の方へ流て今の
常盤橋も平川筋なりしといふ平川の流を隔て北の方神田八芝崎道場もありし故に今の
芝崎ハ東国寺などありしと云也此ハ今の　御城内并　御本廓の辺古社なり
しあり平河天神又山王社薬王院并　昔ハ田安　龍宝山福寿院　今麻布　法恩寺　今本所　吉祥寺　今駒込
吉業寺　今麻布　東光院薬師　今下谷　大法寺　今押上　源照寺　今赤坂　浄土寺　今牛込　金地院　今芝　青松寺　今日比谷　西福寺
正覚院　今牛込　誓願寺　今浅草　養玉院　今下谷　教覚寺　今浅草　法禅寺　今深川　などもありし

御城地廣ぐりしかハ各代地をなりて　御城ゑくらうり手後再ひ智地をなりて當時の西
うつりしなり要し記るハ往く古記にみえたるハ畧ス
藤穂集云町ゝ普請の儀ハ只今の日本橋所より及三河岸迄り豊塚をあらしむ始
里にて支より順ゝ豊塚横塚とも不出来て手揚土をあり端に山のごとく積上ゑくしを
法恵より集り来りし町人共願出しへ其町屋を割下さしむ以付彷彿に次第に右の揚土を
引取地形を築立屋敷丸を仕り表通りにハ此ハ藤垣なといふ並追ゝ家作をつくり
引移り始の程ハ町屋形ひの者も多く無く所に伊勢の国の者共数多来り屋敷を
仕し事ゑこと町屋が来ひ口後表に至りし暖簾一町の内に半分ハいせやとかく出付
みえたりとなり云々　事跡合考に及三河岸　御入國の後桟木町新を並べてあり
後年武家屋敷となりて東の外へおさましもの今の桟木町なりとあり古町の事
ゑ服ゑ家及ゑ事もあまと粗きを
をいとひてあらはしまくる
其の時日本橋をたしめて撤ける見分集云大川なまたハ川沖へ西方より
石垣を築かし撤けなふ変板の上三十七万円又五寸廣さ円万武又五寸なり
又云其の橋法普請の時分日本国の人あつまりて撤ける橋なりし橋の名を
人名ハかつて以て名付ゑ天よりや降ゑん地とりやかゑん法人一同に日本
橋とよひ始る事希代不思議と沙汰せりと云々

○夏の頃　台命ありて九月芝愛宕権現社勧請なさしめらる　此時ハ第の仮屋
にてありしなり　○四月芝預ち鐘楼御建立　此時神田にあり　○神田山幡随意院神田
慶に第剣　宍山白　乃和尚

慶長九年甲辰　八月田

二月日本橋をもとゝ定めらるゝ東海道及越後陸奥等の諸道へ一里塚
を築しめらるゝ二十六丁壹里の積りなり　其の方右へ松を栽しめらるゝ夜ハ木蔭に
休ひ冬ハ風を除て諸人の裨益となし
なへり　○永楽銭の代りに鉦円又をかゝらく用ふ　青木氏の説に此ゑ十五ゑ文合壹文
にあるといへり此時代銭ゑくに宋銭く
して十分に一石を易るとみえたり諸物價も
銭ゑれハ武家のうまひもなりしよしなり　○又臺山源空ち湯浴に宍剣　宍山円蓋　霊門上人

同十年乙巳

増上ち門前の老翁吉夏を感して和尚に告く翌日伽藍営構の
台命を下しなふ文とり本堂回廊等御建立ありて大伽藍となる方丈も

弘時五造営有〻云 事跡今考云ふ所なし営の地植槇の事をいふ
○大城御普請ふ付柳町のる場御用地ひまありふの辺の遊女屋ともえ移〻
預ち茶へうつる○弘法代迄くふ道橋多くあり武家隣郷雑雑ふ一
○南蛮ともりタバコ蕃種を渡ル長崎ふうく栽ゑ始めそしめてタバコを栽る
一説天正中蛮人
持渡るともいふ

慶長十一年 丙午

大城を築ルのふ二月ともり始り九月ふ成就ふあり 此時加藤肥後守清正
自ら奥楯のお立ふて毫ル
をふ営しめらるとぃふ ○選擢〻御書兼物とも場る彼ふの使も茶ふ出ス 慶長六年
のルをとなり商船のちそん 石城英田弾〻御書ふ仆ぶ 以上家康雑談ふあり家康云田淳とぃふ
を先営しめらるとぃふ 国ふ永住りしふ番舟のあつまりうと云〻
を援年ふ渡来ふり

○六十六州行営を給て拈る○秦ル昌清ち三河稲荷後河の産ともり移〻
のふ○十二月八日永楽銭法修正錘ともり用ふへき旨日本橋〻高札を

立ともる 或十二年
ともいふ
小栗氏廃の時営ふて永楽銭を用ふへしと令せられびと残ル上方へよりしう天下ふ
一統とあり二銭九文ふて用ふあるまともふ永楽一銭の方ふ
ゆかて若ふをえともひ百氏安うふとりて今年永楽
或ル云永楽銭一枚又金壱両ふ営ふ百貫ふあるル時ふ
あつふ永納の年貢あるハ送風ありびと百銭ふ足ふ
永楽ふ一せんの価を除て九十六銭をもりて通用をとぃふ

同十二年 丁未 江戸

二月十三日ともり十六日まて 御城の奥ふ於て観世金春勧進能ふ行あり
同廿日同所ふて雲の神子ふ国勧進ふ奇舞妓ふ行あり 貝合ふ菓ふおらふ人
の本ふ山茶の骨董菓ふ〻
菓ふて火を吹をけりを吸ひ吸きせるを用ひて紙ふ張せ〻きせるの製ふふ
用ひ或ハ竹のラウを用ふ又火きりものを下敷ふりふく遊汐せるふもんとぃふ
○迎湯関白伝平公御下向ありし時柿茶ともを献ふ歌をふのふ

まつこせら茶ふいてこそ歌をともあつめても事とそまりを

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

来たる見るけむ法しの国乃江戸かたへ小とひろしの角田川なり

○閏四月朝鮮信使初来聘（正使呂祐吉副使慶選従事丁好寛）○八月八日客星現ハ

慶長十三年戊申

林道春先生御儒者に命せらる此時ハ先生後召に在り

同十四年　己酉

三月四日月の容方にして現る（皇年代略に方形　月出満没如番）

○四月翁津侯琉球を征して中山王尚寧を将ひ来たる

○八月阿蘭陀始て入貢奉書　唐船始て来

○烟草御制禁（一説元和元年ともいふ）○秋品川海辺前島山際より海端まで二十

日間乃道幅を廣けて是往還自由をなさしめらる

同十五年　庚戌　二月閏

其愛宕権現本社拝殿閣門石階に清延立（円福ちもこの時延立元和二年の丙辰紀行に始ハ日ろうの朝なりしを誤りて造りひろげて今ハ大屋となりぬと云）○銀町に知足院御建立（後村院の回名なり）

○七月十九日勅して増上寺十二世貞蓮社源誉上人へ善光観智国師の号をなふ○八月琉球始て後府并江戸　御城へ入貢王尚寧来聘

○宮醫吉田宗恂卒（五十三才　其子宗達又良医の姿えあり大橋宗桂も宗恂の男なりね茶図式一巻を著ハ）

同十六年　辛亥

正月二日竜口蒲生侯御藩失火生門に仙人羅漢の彫物ありて英麗ありしが此時焼たりとて○琉球聘使来○京生弁耶蘇宗再發

○龍徳山雲光院阿蘭陀建立（弓哈町の續なり）○六月廿四日加藤肥後守清正卒

○宮醫養安院正珠卒（四十七才玉翁と号山城国の人なり曲直瀬乃三の門人にして師の姓を冒す其子十年江戸へ召出て宮医ゆゑ

なり後俸を嫡子正円に譲て別荘に退居す）

慶長十七年壬子　十月閏

亜馬港卧亜ちしめて奉書元和七年を新伊西把弥亜始て奉書をのちなし○七月廿四日大霰降○大雪造兵傍并同朝誅せらる　喧嘩を好こ辻切をなほ

の恩賞なりしとそ

同十八年　癸丑

漢又刺亜始て奉書○六月七日神田社地下屋南傍寄町へ始て御譲出あり○九月千葉家後胤国分庄兵傍正勝といふ人先祖本傍乃捺相を

牛御前へ寄進す○十二月耶穌宗の者浅草に於て誅せらる

○強盗勾崎甚内同所に誅せらる　浅草元寺越の辺ことほの刑罪場なり此所の橋を今も甚内橋といふ八月十二日を此今もまつりを

なほといふ

同十九年　甲寅

那波道圓　姫路産悍窩先生の門人之　父に随つて始て江戸へ下る　此時廿歳なり廿九歳の時把州侯の招きにより把州へ下る

千葉数度江戸へ下り

往返の詩文あまたあり

○八月廿八日東刻大風増上寺山門誓願寺山門倒れ

人家損す此川九品寺五重の塔倒るゝ安三丙寅年滅稅せし所にて

百六十九年を経て滅するとし　同人字集に同人曰　こゝにいふ九品寺東洋妙雲寺いかしくの安中に建る五重の

塔ありしよし詩へこれは同寺の塔にも見たる事とそのむかしまた神ちと号せしなれは本是

とも九品寺とよへるゆゑ縁起にも見えたれ文明中万里居士の梅花無尽蔵にも既に妙雲寺

五層の塔とも

あり尚考へし

○羅山文集滅百五十五巻　刊行の書六十本なり日本　逸大郎の文集といへり

○九月南蠻人阿葉陀人来朝ほとの時来りしヤンヤウスにゐたりし地所ヤヨス河岸之ハチクワンにゐたりしが八友町ことといへり

○十月菅文長見人字集滅写本十冊　編者三浦浄心は此来家に仕へし士之原本は

見人字集とのみ題して二十二冊あり永享以来

菅文長寛永との筆記なりしかしかし来又代の事を抄録せるを此来又代記と題して刊行し

其所の抄録を菅文長見人字集と題すとこの菅文長見人字集を抄録して印行せるをもぐろ

抄ふなり

といふ

此年間記事　左に記す所始の六巻来は菅文長見人字集を抄録す

江戸町には川多くありしと古塚川より
流るゝ川是一番中川より流るゝ小松川
なり山王権現の氏子なり

江戸ふいりゝ（とり）細き流ゞ一筋あり（ひ）弁田山麓の神系（せき）とり
なり 中畧 此外 御城堀のめぐりを流（ま）てゆ町へ落る小流ゝ掛（か）
渡せりさまでも皆たゝ掛（か）ゝくゆゑもなき処（ところ）
流（ま）ゝ入（い）に渡（わた）ゝ金の帝（みかど）とり日事（ひごと）へ執後（とりあと）ゝる数百人の唐人（からびと）
ゆゑ（ま）ゝまゝ（ま）ゝをりてゆゑ（ま）ゝ雑子（ざこ）ゆゑ（ま）ゝ雑子（ざこ）ゆゑ（ま）ゝ
とり雑子を集めゆゑ（ま）ゝ班流のゆゑ上（うへ）ゆゑ（ま）ゝを踏（ふま）ゝ
ゆゑ（ま）ゝ雑子ゆゑ（ま）ゝのゆゑ（ま）ゝ掛（か）一ッゆゑ（ま）ゝとり
の町ゆゑ（ま）ゝ雑子町とり

井の水〳〵掛（か）ゝ（さ）ー入（い）万民（ばんみん）ゆゑ（ま）ゝをあげ（ま）ゝゆゑ（ま）ゝを憐（あはれ）みゆゑ（ま）ゝひ弁田山麓の
とり（ま）ゝをゆゑ（ま）ゝの町〳〵流ー山王山ゆゑ（ま）ゝの流（ま）ゝをゆゑ（ま）ゝ南の町〳〵流ー江戸
町〳〵ゆゑ（ま）ゝねゝ（ま）ゝゆゑ（ま）ゝ

虎の御門とり愛宕（あたご）の辺田地ゆゑ（ま）ゝ畔（あぜ）ゆゑ（ま）ゝ掛（か）ゝゆゑ（ま）ゝ
いひ田の中のゆゑ（ま）ゝれをさらり川とゆひー今の源助稲荷（ゲンスケいなり）ゆゑ（ま）ゝ所のとりー
残りゝとりとゆゑ（ま）ゝ云く

江戸町繁昌故勧進能毎月毎日とゆゑ（ま）ゝ事もー
ー能とゆゑ（ま）ゝもー町ゆゑ（ま）ゝいはゝ（ま）ゝ芸人（げいにん）ゆゑ（ま）ゝ演（えん）ゆゑ（ま）ゝ毎日勧（すゝ）ゆゑ（ま）ゝ能（のう）ゆゑ（ま）ゝを催（もよほ）ゆゑ（ま）ゝて該人（がいにん）ゆゑ（ま）ゝ物ー万歳（まんざい）楽（らく）の遊（あそび）辞（ことば）ゆゑ（ま）ゝ
江戸町（まち）ゆゑ（ま）ゝ大名（だいみやう）ゆゑ（ま）ゝ人（ひと）とりの居風呂（ゐぶろ）とゆゑ（ま）ゝ

見人（けんにん）集ゆゑ（ま）ゝ繁昌（はんじやう）故（ゆゑ）ゆゑ（ま）ゝ湯（ゆ）ゆゑ（ま）ゝ銭（せん）ゆゑ（ま）ゝ観世（かんぜ）ゆゑ（ま）ゝ湯（ゆ）ゆゑ（ま）ゝ銭（せん）ゆゑ（ま）ゝ天弁神田明神弁財（べんざい）天（てん）ゆゑ（ま）ゝ
権現山ゆゑ（ま）ゝあゝ（ま）ゝ掛（か）ゝとり吉祥（きつしやう）とり広（ひろ）ゝ座（ざ）とり弥勒（みろく）とり東光院（とうくわういん）とり常（つね）とり寺（てら）ゆゑ（ま）ゝ

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

ありしかれども其事は限りにあらず○本所の富士（其所に塚のと本祠一ツあり）弱込へ
うつして荘厳をなし六月一日大市立て繁昌するとしいへり
以上慶長見聞集に不載（按るに旧説にあるべき事を加へるといふ）
○其の頃頃城屋定りたる廓（くるわ）にあらず所々に散在（さんざい）に麹町八丁目に十六七
軒京六条より来る遊会所に十四軒後所弥勒町より来る大橋の
門柳町に廿四軒慶長十年に元誓願ち前へ引越し大橋は今の常盤
橋にて柳町は今の道三河岸のみなりと云（せいく）雖世義の奇跡考にも前の
説を挙て後に云是普通の説なきと事は合考今の京橋奥足町の
東葦沼の沙入を築立て頃城町とし其地元丸くして一方口にして
南の所側をすこ町北の所側を柳町と名つけ中一筋の通りを中の町と
名つくと云々其の説にとれば慶長の頃は頃城町は京橋の柳町にて今

然柳町まみ町ありと云々（其のあとりのふたりと柳風にふられてとちこ
なびこ云々ことはふこの説を用ひしなり）
其の時世風呂屋湯女（ふろやゆな）を用ひ（見聞集に天正の頃の銭湯のみを云て後に
云その頃は風呂所にんきんの人あまたありて
ありしあつの湯の事や急ぎ語りて其もいまれ頃は煙にて目もあられぬなぐ云て小風呂
の口に立ふさがりぬるき風呂を好こしら今は町毎に風呂ありびこ十五銭廿銭つ
にて入るなり湯女といひてあまめける女共廿人世人あらひ居てありをうき髪をす
ぐ取又は外によう志よくこびひなくんさ多いうにや法し其女房とも湯よ案よ
といひて持来り銭を浮世ぐらりをなし云々とあり蔵穂集に云風呂屋江戸所に
あり朝とりはうし晩は七時に仕舞豆のうち風呂入人の垢を流しは湯女も七ツ切に
仕廻支とりは身の支度を調へ蓋時に至りしは風呂の上り場を用ゐる格子のみを使
にうまへ今の屋風なとを引廻し火を焼し絆の湯女共衣抜をあらためさしせんを取し
小寺ゆうの物をうらひ取集めをせしなり
右の風呂や[illegible]町辺にも一二軒ありしと云々
○書籍（しよじや）を板に刻む事は始詳ならず正治中摺字大乗経の事東鑑に
見えたり又元久三年法然（ほふねん）上人造る所の選擇集（せんちやくしふ）を印板（みんはん）に行ひし事も見えたり
されど戦国（せんこく）の云火に罹（ら）りなく亡ひ天正の頃迄の板刻の書籍の事
なく乏（とぼ）しかりしに慶長以来鑑等の書を刊行（かんかう）し寛永の頃より庭訓（ていきん）

節用集なとは第に梓行し支とり孫盛りにまかり今は年くに殺兒の
書畿万郷といふ所を知らは実に養生の御代の一盛事なるべし
○好古日録云俗に云茶挑灯は豊臣公の時始て製は上下を茶筌を以て
編たり板を用るは茶長以後のみと云天正以前の挑灯は篭に紙を
粘して用ふ男山安居の頭の屋に用る者は遺製なり重茶は茶
来中重ある合篭にもとつれてもしめて製造はとあり 挑灯のみは山東の骨董集にくはし
○二味線始て本邦に渡り来りしは永禄の頃にして泉州堺の津に
渡り賛者中小路といふもの深弘なりといふ世上にて一般に弄べるは
元和寛永の頃なるべし ○泉州堺の銭屋宗安小西清兵清等明人に
習ふて却しろいを製は ○森遊笑覧云茶長の頃の風を古画に見えて
考ふるに男の頭つき贅狭くさうなき大に剃或は半頭若人は前がこと

落て残して中剃をしたり何事も窮は角を入て挽たり誓は脳後に
して曲を吹く来るたり衣服は廣袖もあり半身の服をよこに着たる
まことに茶をしたるもあらんとの彼をまちて着る時は是羽織なるに
べし丈はなが袖も短きもありて一様なるは生平に左右の襟を茶の
辺にくよせてとれ世拡にてことあたる女うに見れ申るあり草の羽折袴も
あり級は大かた横筋に阿まひ廣袖に小級をその男に付たるなし大形
なる横筋を色さしに深たるもあり編笠は扁きも長袖もさなし
見ゆ是鍬を草たび燻小級無地色にて皆打級を付茶は幅大
とそ鯨尺をかりのやわらんと見れ申るを茶後に結たる処見えさるは結
めを下に狭くたるにや武士は大小の下緒を茶に引通したり下部の
男は散髪なるもあしいつまも徐まりてあるに彼を着たり 彼は無地又は横筋まで

白く(徳本書き)うるおごと、その刀を抜又後をのり女ちよき人とみるゞ髪をふりて乱して
ゆけ髪を衣のゆふ巻込よふ衣うつぎ〳〵くり巻の男の革帯と同じ
常の女ゝ元髪を肩のよふまわる袖ふ切く巻さゝ短くまねて襟(えり)の後ふあり首筋の衣抽(ぬき)さゝ〳〵あれとゝ〳〵漆のろふ小苑ふとありよ忘模節なく
細く色〳〵まて生ろ色帯り〳〵くるゝ中ふ小紋分さるも貝んでこれい
練緯(今云夏斗用)又濃さるも有べ〳〵彼の女ゝ既ふうりあるく長柄の傘をさ
撓(うち)き又ゝ色〳〵の縞を縫合さる裳をさ貝ゝうり是も衣被ゝ模節なり
又女の笠ゝ市女笠のゆふうつゝ布を二布合て縫さるを浅のうゝふ
尻ゆまて垂さるあり又ゝ手拭を笠の仆(かぶ)の左右ふ肩のうゝまて
さげさるもあり又男の肩衣帽被(ずきん)くひぢ

あく小紋のゆくうき合て巻紋服の仆ふ模節を浮さり着ゝ武士ゝ交ゝ
紋髪の老人おごゝゝ羽織ゆ一夫和貝ゝ事の従まてもさるゝ有て姓
手扱も雑ゝ貝ゝ白又繋(もぐり)せゝ畜さるもありこゝ

元和元年乙卯　六月閏　七月十三日改元

古田織部(ふるたおりべ)殉死の事　一説六年　慶安三庚

○六月十九日山里(やまさと)御殿(ごてん)炎上(えんしやう)　練塀(ねりべい)焼(やけ)
ありしとの説(せつ)今考(いまかんがふ)ふるに曽(かつて)御城門(ごじやうもん)ゝ内(うち)大名(だいみやう)小路(こうぢ)町(まち)を数(かず)
戸(こ)焼(やけ)しの事(こと)ありしと雖(いへども)御城(ごじやう)ふ火(ひ)入(いり)しと云(いふ)ふ非(あら)ず
氏地(うぢち)の二(ふた)ツ橋(ばし)春日(かすが)の局(つぼね)より山里(やまさと)ゝ附属(ふぞく)ありて内(うち)ふ小(ちひさ)き門(もん)ありしと云(いふ)

○小石川白山権現社(こいしかはしらやまごんげんしや)勧請(かんじやう)ふ是(これ)より前(まへ)ふ小石川(こいしかは)水道(すいだう)の水源(すいげん)ふ当(あた)る地(ち)ふ今(いま)ふ清水(しみづ)谷(だに)ゝ殿舎(でんしや)ふ今(いま)ふ清水(しみづ)殿(でん)ゝ内(うち)ありしとて後(のち)
第(だい)ふ移(うつ)り今(いま)の地(ち)ゝ移(うつ)る

同二年丙辰

非田明神社(ひだみやうじんしや)非田橋(ひだばし)門(もん)より湯島(ゆしま)ゝ移(うつ)る○築土明神社(つくどみやうじんしや)牛込(うしごめ)門外(もんがい)より今(いま)の

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

延べうる○二月呉竹(くれたけ)・前川村(まえかわむら)・親(おや)うち・本所(ほんじょ)・深川(ふかがわ)の六ヶ所(ろくかしょ)の名主(なぬし)等(ら)、御救(おすくい)の御米(おこめ)を請取(うけとり)、町々(まちまち)へ割渡(わりわた)す。

深川(ふかがわ)十万坪(じゅうまんつぼ)・石場(いしば)・八幡(はちまん)・洲崎(すさき)・永代(えいたい)・佃島(つくだじま)・霊岸島(れいがんじま)・越前堀(えちぜんぼり)・鉄砲洲(てっぽうず)・湊町(みなとまち)・新堀(しんぼり)・八丁堀(はっちょうぼり)・南茅場町(みなみかやばちょう)・北新堀(きたしんぼり)・本材木町(ほんざいもくちょう)・霊岸島(れいがんじま)・新川(しんかわ)・酒問屋(さけどんや)・新堀(しんぼり)・小網町(こあみちょう)・行徳(ぎょうとく)・船宿(ふなやど)・浜町(はまちょう)・堀江町(ほりえちょう)・久松町(ひさまつちょう)・富沢町(とみさわちょう)・人形町(にんぎょうちょう)・小伝馬町(こでんまちょう)・大伝馬町(おおでんまちょう)・塩町(しおちょう)・横山町(よこやまちょう)・馬喰町(ばくろちょう)・両国(りょうごく)・薬研堀(やげんぼり)・米沢町(よねざわちょう)・元柳橋(もとやなぎばし)・矢ノ倉(やのくら)・竪川(たてかわ)・二ツ目(ふたつめ)・御蔵前(おくらまえ)・浅草(あさくさ)・駒形(こまがた)・蔵前(くらまえ)・諏訪町(すわちょう)・森田町(もりたちょう)・猿屋町(さるやちょう)・三好町(みよしちょう)・平右衛門町(へいえもんちょう)・瓦町(かわらちょう)・天王町(てんのうちょう)・阿部川町(あべかわちょう)・新寺町(しんてらまち)・聖天町(しょうてんちょう)・山谷(さんや)・今戸(いまど)・橋場(はしば)・小塚原(こづかはら)・三ノ輪(みのわ)・金杉(かなすぎ)・下谷(したや)・上野(うえの)・池之端(いけのはた)・湯島(ゆしま)・本郷(ほんごう)・駒込(こまごめ)・谷中(やなか)・根津(ねづ)・千駄木(せんだぎ)・団子坂(だんござか)・白山(はくさん)・小石川(こいしかわ)・伝通院(でんつういん)・牛込(うしごめ)・市谷(いちがや)・四谷(よつや)・麹町(こうじまち)・飯田町(いいだまち)・九段(くだん)・番町(ばんちょう)・半蔵門(はんぞうもん)・麻布(あざぶ)・飯倉(いいくら)・芝口(しばぐち)・愛宕下(あたごした)・増上寺(ぞうじょうじ)・三田(みた)・高輪(たかなわ)・品川(しながわ)・白金(しろかね)・目黒(めぐろ)・渋谷(しぶや)・青山(あおやま)・赤坂(あかさか)・溜池(ためいけ)・虎ノ門(とらのもん)・桜田(さくらだ)・日比谷(ひびや)・数寄屋橋(すきやばし)・京橋(きょうばし)・日本橋(にほんばし)・神田(かんだ)・浅草(あさくさ)・本所(ほんじょ)・深川(ふかがわ)の六ヶ所(ろくかしょ)の名主(なぬし)等(ら)、御救(おすくい)の御米(おこめ)を請取(うけとり)、町々(まちまち)へ割渡(わりわた)す。

○十月(じゅうがつ)、新川(しんかわ)・堀割(ほりわり)普請(ふしん)を興(おこ)せらる。○麻疹(はしか)流行(りゅうこう)。

○朝鮮人来聘(ちょうせんじんらいへい)。○羅山先生丙辰紀行(らざんせんせいへいしんきこう)成(なる)。此紀行(このきこう)ありて人多く来聘(らいへい)を記(き)すと雖(いえど)も、まだ此(この)ごとく人多(ひとおお)く来聘(らいへい)せしことなし。

○十月(じゅうがつ)廿四日(にじゅうよっか)光源山天徳寺焼亡(こうげんざんてんとくじしょうぼう)。○新田山智泉寺(にったやまちせんじ)幡随意院下谷池之端(ばんずいいんしたやいけのはた)へうつる(万治二年今の地へうつる)。○春日局(かすがのつぼね)忌辰(きしん)。

元和二年　丙辰

正月(しょうがつ)、諸家(しょけ)より歳暮(せいぼ)の祝儀(しゅうぎ)を献(けん)ず。

二月(にがつ)、大坂町(おおさかまち)・雲母町(きらまち)・新町(しんまち)・安針町(あんじんまち)・佐内町(さないまち)・吉岡町(よしおかまち)・弥左衛門町(やざえもんまち)・数寄屋町(すきやまち)・北槇町(きたまきまち)・南槇町(みなみまきまち)・木挽町(こびきまち)・三十間堀(さんじっけんぼり)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)の家ふいとあまむ。

三月(さんがつ)、京町(きょうまち)と号(ごう)す。そのゝち町割(まちわり)をなす。

大坂町(おおさかまち)・雲母町(きらまち)・新町(しんまち)・安針町(あんじんまち)・佐内町(さないまち)・吉岡町(よしおかまち)・弥左衛門町(やざえもんまち)・数寄屋町(すきやまち)・北槇町(きたまきまち)・南槇町(みなみまきまち)・木挽町(こびきまち)・三十間堀(さんじっけんぼり)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)の家ふいとあまむ。

三月(さんがつ)、京町(きょうまち)と号(ごう)す。そのゝち町割(まちわり)をなす。

大坂町(おおさかまち)・雲母町(きらまち)・新町(しんまち)・安針町(あんじんまち)・佐内町(さないまち)・吉岡町(よしおかまち)・弥左衛門町(やざえもんまち)・数寄屋町(すきやまち)・北槇町(きたまきまち)・南槇町(みなみまきまち)・木挽町(こびきまち)・三十間堀(さんじっけんぼり)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)の家ふいとあまむ。

三月(さんがつ)、京町(きょうまち)と号(ごう)す。そのゝち町割(まちわり)をなす。

大坂町(おおさかまち)・雲母町(きらまち)・新町(しんまち)・安針町(あんじんまち)・佐内町(さないまち)・吉岡町(よしおかまち)・弥左衛門町(やざえもんまち)・数寄屋町(すきやまち)・北槇町(きたまきまち)・南槇町(みなみまきまち)・木挽町(こびきまち)・三十間堀(さんじっけんぼり)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)の家ふいとあまむ。

此時呉服橋御門内を拝領ありて、ここに移るといふ。○朝鮮来聘使一冊、羅山先生編之。又寛永二年の条に、朝鮮人来聘の事を記すといへども、此ごとく人多からず。

○この頃より遊女町を一つにまとめ葭町(よしちょう)と号(ごう)す。

○小田原(おだわら)陣(じん)初(はじめ)て聞(きこ)ゆ。

慶長(けいちょう)十九年(じゅうくねん)十一月(じゅういちがつ)、普請(ふしん)終(おわ)りて舗(しき)を定(さだ)めらる。

京橋(きょうばし)より南(みなみ)へ町割(まちわり)をなせし頃(ころ)、京町(きょうまち)と号(ごう)す。

大坂町(おおさかまち)・雲母町(きらまち)・新町(しんまち)・安針町(あんじんまち)・佐内町(さないまち)・吉岡町(よしおかまち)・弥左衛門町(やざえもんまち)・数寄屋町(すきやまち)・北槇町(きたまきまち)・南槇町(みなみまきまち)・木挽町(こびきまち)・三十間堀(さんじっけんぼり)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)・木挽町(こびきまち)・山下町(やましたまち)・宗十郎町(そうじゅうろうまち)・木挽町(こびきまち)・芳町(よしちょう)・堺町(さかいまち)・葺屋町(ふきやまち)の家ふいとあまむ。

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

元和四年戊午　三月閏

四月浅草寺に　御宮御建立あり（今の清水明神の辺なりしといへり）○日本橋御茶屋

○御城の辺より火火樣田迄焼失○十月寅の刻長雲分　彗星分

○同白石動堂御再建十一面観世音を安して東叡山新長谷寺と

あらくに也（中興宮山秀算僧正なり）

同　又　年　己未

夏より冬に成りて毎夜白氣東南に出る年の角の如く長数十丈又

彗星東北にあらはれて火光の如し

○又月より八月まで大畢又穀出しに人多く死に

○大坂御在書始○長谷川其家と云ものの為久保八幡又境内にて

時の鐘等創設延宝中其切毎しく稱る○九月十二日猩窩先生卒

九十九才三門人林逆春先生六いにも更なり名波尼円塔正宗

菱原得菴松永昌三三宅寄斎其ものとも世に使西

同　六年　庚申　十二月閏

稜（ふくじ）聚山普門院陽田川の辺より飛戸村へ移る○三月十四日後藤四代

光乗卒（九十二才）○十一月二日増上寺中興観智（ぐはんち）國師入寂（七十七歳）

○浅草御蔵始てく建○日本橋を築せらる（其除の為に築せらるゝ所なり日本六十餘州の諸侯

出る時にて御来る所に志ろ名つゝる所或八日数六十餘日にて御来る所とも云て詳なる此）

同　七年　辛酉

二月観世左吏一代能興行其場所東洋

○九月廿二日小堀（こぶり）遠州侯上京殺是に時友達なるの儀とて神宗

川の中ちりく酒肴茶なと送らるゝ也

為り来んとちかるもあらし人心さくこめなき世のさくこめなき事

○十二月十三日織田有楽齋卒　七十才住居の町を元敷奇屋町と云
今にあり有楽齋住居ありしなる

元和八年壬戌

活所遺稿　壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々　閑座牕間東武春　諸葛青蓮開隻眼
笑而不答當時人

○十一月源通村江罪を法下向あり法紀行を実東海道記とてあり
十二月十六日
江戸にて人々あひ行りしに家士にて奇なるやといひしかへ
家士のねたみしやいふと聞ふひとに氣をてふへきことの事にてなき

同九年癸亥　八月閏

正月明の後建漳郡統邑徐勲浅草ちに観音堂のこと字を書して
郷を掲る○正月又日智芸白道幡隨意上人寂　七十四才上人在世の時に立ての寺物あり法人号みな
出の名号を承ること更にて其年中神田の地に播磨元流剣立檀林と成る
○芝坊上ある山門御再建
○十一月十六日碁所本因坊日海寂　六十四才算砂と号に一書あり又月とあり

世年間記事

女奇婦妓を禁せられ男奇婦妓となる　女の名といふ遊女なり婦をとるを称して和尚とよべり男うきはなり
てはやふくるを撰て婦たしむ
○本所一ツ目より葛西まで橋通して一二三四又の橋を掛
毎通しめ寄六元和より寛永の始の男の事なりといへり　茂穂集書

寛永元年甲子　二月晦日改元

伊勢伊雑宮より長宮お江市以太神宮を江戸日本橋通二丁目へ
おかふ同十年にあり今の地へ　塗師町代地　迂座なしなる
○長盛法印靈夏を感し永代禹に八幡宮を勧請して同八年再

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

真あり ○同年目黒村不動堂再建 ○伊須把尼亜使来

○東叡山寛永寺御建立開山慈眼大師なり 寺跡今考ふに此地ハ藤堂家の屋敷の地を寄附ありし所ふして
藤堂家の邸地上野にありし故藤堂をさして上野と云しを思ひて上野と云ひしならん
のみ昭ハ寛永くこの地の名ともなりしならん 小野照崎社ハ今の寒松院の辺ふ
ありしを此時今の地ふ移さる又此叡山坂本の
名を移して入谷村の町を坂本町と号す

○道本山霊巌寺創建 此所ハ今云霊巌島の地也雄誉霊巌上人 此辺を築立て建立ありし故なり

○明石志賀之助寄相撲を号し四ッ谷塩町にて晴天六日興行す 江戸勧進角力の始めなり あるよし古今相撲大全に見ゆ ○二月十五日より中橋ふ於て中村勘三郎猿若芝居
櫓を揚て興行す 後禰宜町へうつり又堺町へ移しを
元和三年丁巳五月猿若勘三郎といふ人の紀行ふ中橋ふ於て踊りを催し初めてあやつりの芝居
ありしをもいくり勘三郎興行の芝居よりせめて興行ありしと見えたり

○十月十五日小柄原杉森権現社の額に源の二字を現す之を日本にして
見るに別当源昌院主の二字を出して刻す 此別当因幡院福聚ありかとり

○十二月朝鮮人来聘 正使通政大夫鄭岦 副使通訓大夫姜弘重 従事辛啓栄

寛永二年　乙丑

○湯島ふ麟祥院創立 寺号は始め報恩山天沢寺と云 寛永十一年天沢山麟祥院と改む 春日の局法名麟祥院仁淵了義大姉と号す 寛永廿年癸未九月十四日逝去あり 従二位

○南八丁堀一丁目ふ在し稲荷社並高橋八幡社ありしを此所の町屋建つゞきし故今年の春稲荷社八幡宮の両社を移す 高橋の下に此所の橋をいありしといふ

○八月緒紬一揆大工の者とて二千ヶ人数人慢一尺寸木綿一揃同等之人の慢一尺寸に定まる

同三年　丙寅　四月閏

○亀戸天満宮鎮座 寛文年中より今の所へ移し奉る 社殿造営は大鳥居氏信祐の功なり

○四月より八月迄疫病流行 ○二条御城御普請始る

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

○耶蘇宗再發　○九月上野に
神祖御宮御建立　茂木家より法建立といへり或は云東叡山の院号円頓院と号せらるゝ今通ありといへり
○十月吉原の町の家々全く舊法城　すみ町は京橋のすゝ町より今通引籠しとる町なり
○武藤志料に法華家深秘録を引て寛永二年に二条の御城へ行幸あり此時御建立改宗の家に英くし其家を忌けきは法華の人々にあらずしかれば其の時の人御建人也と云始しより今にいたり風流なる人也
御建ものと云ふ事ハしけりとあり
○武藤志料に寛永記を引て云寛永二年十一月十日烏丸大納言光廣卿法下向の序江戸須田町を無りなひし須平親王の古墳あるを見ぬひて帰京の後勅勘の儀也久しければ勅免あらん事を奏聞ありて同年十二月九日勅免ありしかば神田の社内にまつりけると云々　按るに元和二年藤山先生の丙辰紀行に神田社は平親王の其を祭るとし記されてありしに和に志ら記されたるに寛永二年のけ社地に祭ありしなり

寛永四年　丁卯
二月源通村卿御下向あり　成原瑞龍山真雲寺諸岳和尚へ書ハ
紫のかゝにしさ記て武藤の家の内うりの床なりの事
○東叡山仁王門常行堂法苑堂　二ツ堂といふ　經堂宮室塔号御建立　此時法堂宮成就
○四月八日其愛宕山権現社火　災後再法造営有　○八月洪水
○大地震　○十一月塔伽沙古来　使の名を理伽ト云　○新羅とり琉球へ渡りし商船の経藩帥へ始て渡る　生角ら編の新樹子に商船は二十年来の事なりあと　あまたは江戸にても万治寛文の頃より行きしなるべし

同　五年　戊辰
正月二日京橋紀伊国屋又右衛門といふもの元来無事なりしら大師河原弘法大師の示現を蒙り六字の名号を書ハとつて二月廿一日名号を書して常にする事を立る　霊義月盛居士といふ

○正月廿日　柳営に於て御連哥會あり　足江城に連哥會の始りありとそ　兼題日来十一日にあらさるなる

○五月廿三日入答正覺ち開山嚴育禪師寂　三君恩城より来りし人なり　壽百五十七といふ称らきも壽なり

○一刀流小野派剣術祖小野次郎右衛門率去　勢州の人にして孫子上典招中ゝいふ上総に居らまし時伊藤一刀斎に学ふ後江戸に居し祖父の氏を継て小姓と改めたる

○十二月十日宮医今大路道三率　八十三才

○所々辻斬行る○十二月麻茂徳元　医師にて連哥をよくす　冥来へ帰りて唅町二丁目に居す　冥来下向の記あり其時の句　むさし姓名ころたしろ冥士の雪

○江戸にて句集を梓に行ふ事この人に始まり

寛永六年　己巳　二月国

六月上旬より国黒村不動尊諸願成就せるとして像を江戸沖老若男女群集す○七月廿七日玉室澤庵の大僧を流さる沢菴は羽州上の山玉室は奥州柳舎へ競く　玉室の法嗣正隠大徳なるに世の後ちよりて玉室江月沢菴の三師流罪せらるべかりしに也へあつて江月はなさめらまた玉室沢菴支師をなげさる下姓大田原とり二師ともまて奥羽の支地に競く

沢菴師一偈をもて別を告て曰

天分南北両鳧飛　何日舊栖同翼帰　聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

玉室額を和して云

草鞋竹杖與雲飛　舊院何時把手帰　水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日沢菴完上に忘す

完上川に漸に月も流さまて志ちし深世にすむかひもなし　沢菴

ふひきやこよひの月をみちのくのあこやの松のかけにこんとは　仝

二師流罪のゆくへしくは沢菴和尚の後講をみんて志るべしこの時　仙洞の御うたなり

ゆくゆ月の宿も玉の室もなかまてのこるにこりの月

此ころ民間の犯罪に
江戸喋喋を二まりすりて一まりはみそうまたたりのこる江月
○今年より我家にて辻番を立る場にて於て辻斬ありしかとそ

寛永七年　庚午

正月八日隅田川にて
古塚の志るし[illegible]柳[illegible]いさまたまむ首しる所と　[illegible]
○二月十四日醫師甲斐徳本率　百十七才といふ[illegible]
徳本一後十六歳と唱あるきたるに
とかや著述の医書を梅花[illegible]
○二月小溪誕生寺にありし布引祖師
像年迄無恙へうつれ○四月二日身延久遠寺日還沈上本門寺
日樹宗論日樹絵及飯田に配流○六月琉球人来聘
○同廿三日大地震毛降○八月山王社法造営
○魚籃観世音三田の地に安置れ　[illegible]

○十二月廿三日大地震成刻光物発行し[illegible]

同八年　辛未　十月閏

三月十九日江戸中に灰降○同廿日諸国井露降
○四月二日浅草寺[illegible]上○去年より今年に至六十及波癬瘡を病
む者多し○東叡山に大佛像　丈六釈迦　造立あり　[illegible]
[illegible]
[illegible]
を折る○十月灰降○十月十三日後藤氏五代徳[illegible]率　八十才
○十月十七日上野大石燒誘立　佐久間大猪亮勝之と
[illegible]
同九年　壬申
諸家深秘録に云今年より奥及仙臺の米穀始まる江戸へ出る今
[illegible]江戸三分二ハ奥及米の[illegible]
[illegible]

○中村勘三郎ハ芝居中橋より稱宣町へ移る 今の人形町なり

○茅廬雑誌云 寛明日記寛永九年の件ハ黄金一万ハ分銘六十
匁稲ゆゑあまハ五十匁の内邦と見えたり

○玉室澤房二師滿處より召還しなひ七月廿七日江府にいたり
祁田の廣徳寺ハ寓江ハの冬澤房ハ弱辺塔氏ハ寄居を翌年
二師を大徳ハ歸せしめなふ 沢房師寛永十四年麻布ハ寓居あり
しハ而居を扁して検東庵といふ

寛永十年 癸酉

上野忍ハ忍林道春先生別莊ハ先聖殿を建しる 尾張公法建立之時所を
撰ハ墨と云ふさらハ
再ニ山ハ此ハ栽らまし所なり今の山王の山
なり事ハ鵞峯文集撰峯記ニ詳なり ○正月廿一日廿二日諸國大地震小田原ハ
別きて強し同廿六日申刻大地震

○武州忍の城御番城となりしハ今年松平豆州侯へ為ハり法城番の
面々江戸へ歸宅地を為たりし所を忍原亦忍町とよべり

○四月より六月まで洪水 ○南鍋町二丁目の水川を埋め町屋を
せらる ○都鍋内芝居法苑ありて興行ハ 其地未詳

同 十一年 甲戌 七月閏

正月十又日増上寺ハ学上人念佛三昧にして臨終しなふ茶毘の後
身骨悉く舎利となる ○二月二日 御城にて御能芝居町人
諸見をゆるさまた青洞を揚るゆ見とり始りけるとし或記ケリ
見えたり ○三月九日初基師大橋宗棟率 八十才

○三月十又日藤白雲月を貫く ○王子稲現社 芝祁明宮
再久保八幡宮 同忍西勤堂寺御造営あり 仏王も法乗建なり

○水川妙雲寺本堂及重増二王門法乗建

○平塚明神社御建立秋ニ至ル成就ス

○當年より山王法楽禮待り大祭禮と成る

○室林山善国寺鶴町代地として国の谷へ法る

○七月琉球人来聘 正使佐敷王子今武王なり 第二条に来る ○村山又二郎共居葺屋町ヲ於て始て真行 市村羽左衛門祖なり ○八月八日或る貴の法家の室 おさんのむし 法方と云 出歯をなせしなひ終に今日終ひ来り 臨終に遺言あつてむしばを焉る其家を祈ふ恵強あるべしと誓ひなふ 阪倉若出ちに法蓋あり今も其強を切るもの多しと云

○明人安計 後鮑の上手之 江戸日本橋安計町をなせり又本州三浦逸見村を願て其妻妹満尼今年七月十六日終逸見村浮土ちに墳墓あり安計ハ忌日ハ墓碑に鐫してあしとそ

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震年来刻又地震あり ○後府法王審始る

○春烏丸大納言光慶ハ冥来法下向ありて法の記を春の曙出いふ 此時世ハ度々法下向ありて久しく法運留のつもりありしとみえたり 又源通村ハも法下向あり

春なしなれ木の葉もうるふむさし時に来まてうゝる雨の恵かけ

○安宅丸の御船伊豆より来る 一説に寛永十一年とも云 柳川町の辺に船をあり繋立しに一年大風雨の時頻切まて伊豆へ流る 三諸ゆく止め又向ゆゆにつゆぐ天和二年より此法船を解ひしなるに

○三月天台龍家寺并浮金寺後河堂ハ浅草へ移る ○四月朝鮮人来聘 和田倉法門の内ニ場ニて韓人曲ヲ奏ふる

○六月十三日大風遠州豆州後海の船八百艘破損す

○七月天来くして如焼 ○高橋如来ニ異刻五智如来を安立ス 木合 但唱上人室基 ○八月芳坊町某師如来安立

○八月四日将軍山楽光祐年 七十七才 ○堺町天下一ヨリ薩摩ニ支

然るの幕を蔵前戸の上に張人形衣裳結構をつくし又寺に歌妓済
其外の衣裳等も美を尽せしかハ老若此所もなきに群集せしる

寛永十三年 丙子

正月元日日蝕 ○霊岸島を築立らる ○高田に八幡宮勧請(此時八幡)
の小羽之手後之様 中を追く出営有 ○大城御外郭(そとぐるわ)惣構見附(みつけ)桝形(ますかた)等御普請ありし此の時
御城近辺社寺所々へ移さる

萬葉集 寛永十三年江戸に於て大樹城郭修理の事ありしを云へ
人清くふ千歳の后も世乃こゝろの挫さまる事なしとそひく 烏丸光廣卿
東向庵話云 麹町六七町目の地は旧谷町の辺にありけり今年此外郭を造らせ
せらる附近の撫民を以て東西の谷を埋平地になりしか旧名をもて四谷又坂町と
ものせし又甲斐坂といふもありとそいへり前ハ東といひしと
御入国の頃今の糀町西側番町永田町辺まて谷あり寛永中御郭の内中に
としてはかり造しとも 御城を出でし市中谷の蓋所を中し其表四八十余

只尺人さし迄ける所に石垣くいりたくとありこの時普請の時京都より牛車率来
り牛車の通路として市谷八幡宮の前より四谷伝馬町の地を中通し御用の事
済りて後江戸に止められ寛永十六年
其後ふたゝひ今の牛町をおかれしといふ
○井の頭弁才天社御建立 ○高割辻番所始る或ハ五年ともいふ
○江戸御後藤六代栄乗卒 年七十三才
○五月六月の間大雨洪水(五月中旬より大雨はれず洪水にて溢る事九ヶ度)
○新銭を鋳らる(寛永通宝と書く) 六月朔日より通用始る是より前本朝
の銅銭は皆異国の銭を用ひ来りしか此時始て本朝にて
江戸にて浅草と芝にて銭を鋳させらる其後諸国にて銭を鋳らる所なり
近江国坂本南部仙台松本二本松吉田
備前国高田村にも所々にて鋳させしかとも水戸佐渡まて鋳させらる其後鋳造
の悪銭を停止せしめられ古銭の世に流行しける所に新銭を鋳らる文銭
完全なるのみ新しく今の寛永通宝銭も鋳る事なく
まつ工を愛すさるものなりと云く寛永銭を世まて度く鋳る事はなし
形時等の違ひあり無紋の背字文字なる寛永銭ハ諸国にて図を揃し其の銭を参けて

839
8
62

詳なり此事掃除の行れ
さまへ世ゝ稀なり

○十二月朝鮮人来聘　正使白鷺任統副使東渲令世濂
従事青丘黄床　猿波本誓なく

武江年表巻之一　畢

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62

ガラス使用